

メグロ 英:Bonin White-eye 学: *Apalopteron familiare*

1. 分類と形態

分類: スズメ目 メジロ科

全長: 約140mm 翼長: 60-72mm
 尾長: 59-65mm 全嘴峰長: 16-20mm
 ふ蹠長: 23-26mm 体重: 13-17g
 ※ 著者による測定値

羽色:

成鳥では頭部、背中、翼、尾は灰緑色、喉から腹にかけては鮮やかな黄色を呈する(図1)。くちばしは黒、脚は灰色がかった黒。眼の周りにはメジロと同様に白いアイリングがあり、その外側に和名の由来となる黒い逆三角の模様がある(図2)。雌雄では特に羽色の違いはない。若鳥では腹側の黄色みが薄く灰色を呈し、脚が黒光りしている。メジロに比べると尾羽とふ蹠が長いのが特徴。



図1. メグロ成鳥



図2. メグロの頭部。メジロと同様に白いアイリングがある。

鳴き声:

さえずりはチヨ、チヨチヨルルルイー。ルリビタキに似ていると評される(蒲谷・松田 2001)。繁殖期の日の出の直前に集中してさえずり、日中はあまりさえずらない(Suzuki 1993)。地鳴きはキューイ、キューイ、チーッなど。

2. 分布と生息環境

分布:

小笠原諸島の固有種で、戦前は智島列島の智島、媒島、父島列島の父島、母島列島の母島、向島、妹島、姪島で生息記録がある。現在は母島、向島、妹島の3か所のみ分布し、他島では絶滅している。智島では1930年(山階 1930)、媒島では1889年(Seeböhm 1890)、父島では1828年(Kittlitz 1830)、姪島では1904年(榎山 1930)がそれぞれ最後の記録である。1935年に上野動物園で飼育記録がある。

生息環境:

高木湿性林、乾性低木林、農耕地、集落など、さまざまな環境に生息している。森林を好み、高木湿性林では生息密度が高いが、開放地では密度が低い(Kawakami & Higuchi 2003)。

3. 生活史

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月

繁殖システム:

繁殖期 非繁殖期

通常一夫一妻で繁殖する。繁殖期の中心は3月頃から7月頃で、二回繁殖を行うこともある。繁殖期には縄張り意識が強く、侵入する他個体に対して排他的な行動をとる。

自らの巣の近くに営巣したメジロの抱卵中の巣に対し、巣材を引き抜いて破壊する行為を観察したことがある。剣呑、剣呑。非繁殖期には、若鳥を中心とした群を作り移動する。メジロやヒヨドリなどを含む混群となることも珍しくない。成鳥は年間を通してつがいで行動し、繁殖地周辺で過ごすことが多いが、群れにも参加する。メジロと同じくつがいで接触就眠を行う(Higuchi *et al.* 1984)。

巣:

低木から高木の枝の又上にカップ状の巣を作る。巣の地上からの高さは1~13mで、営巣にはシマシャリンバイ、モクタチバナ、テリハボク、シマグワ、アカギ、ガジュマル、トクサバモクマオウなど、様々な樹種を用いる(Morioka & Sakane 1978, Higuchi *et al.* 1993, 上田ら 1993等)。メグロに近縁とされるオウゴンメジロを含め、多くのメジロ類は吊り巣を作るが、メグロでは吊り巣は見られない。過去に1例のみトクサバモクマオウの樹洞内での営巣が報告されている(Kawakami & Higuchi 2002)。

卵:

一腹卵数は2~4卵で、薄い水色の地に茶色い斑点がある。長径約20mm、短径約16mm。ヒヨドリが卵を捕食することがある。

抱卵・育雛期間:

抱卵期間、育雛期間は、共に2週間弱である。抱卵や給餌などは雌雄共に行い、巣立ちビナに対して長いときには1か月もの給餌を行う過保護な鳥である。

4. 食性と採食行動

図鑑などではパパイヤを食べている姿がよく掲載されているが、実際には鱗翅目幼虫などの昆虫を中心とした動物質を主な食物としている(Kawakami & Higuchi 2003)。ヤモリを食べることもある。パパイヤやガジュマル、シマグワなど外来果実を好んで食べるのも事実だが、これらは目立つところにあるため、その姿が強調されているものと考えられる。パパイヤを食べすぎて体が黄色くなったわけではない。昆虫の中では、アリをよく食べることも特徴である(図3)。アリは防御のための毒を持つことが多く、好んで食べる鳥は限られており、独特の性質といえる。



図3. 糞の中には、よくアリの断片が含まれている。写真は主に頭部(同定に使用)。

木の枝葉で採食するとともに、地上や樹幹で採食することも多い(Kawakami & Higuchi 2003)。これは、キツネなどの地上性捕食者やキツツキなどの樹幹利用者が生息しない海洋島で進化したため、ニッチが拡大しているものと考えられる。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 目白がメジロになるまで

DNA分析からメグロはメジロ科に近縁であることが示されており(Springer *et al.* 1995), 鳥類目録第7版ではメジロ科とされている。メグロに関する最も古い記録は1675年の嶋谷市左衛門一行の巡検で、「目白ニ似申鳥五ツ」を採集し幕府に献上している(鈴木 2003)。明治時代には地元の人々に島目白や黒目白などと呼ばれており、やはり目白の仲間と認識していたようだ。しかしこの鳥は分類上の地位が落ち着くまで時間がかかっており、ヒヨドリ科やチメドリ科などに分類されていたこともある。目録第6版まではミツスイ科とされていた。時代により、図鑑により、メグロの分類上の地位は変化しているので、要注意である。

● 小笠原だから海が好きとは限らない

メグロが現在分布する島は母島列島の母島と、その属島の向島、妹島の3か所のみである。母島列島には主要な属島として他に平島と姉島、姪島があり、これらにはメグロの生息可能な森林が残されている。しかし、先述の3島以外にはメグロの個体群は存在せず、他の島では一時的に移動する個体も見られない。

そこで、母島、向島、妹島のメグロの血液を採取し、ミトコンドリアDNAの制御領域の配列を比較したところ、母島、妹島では固有の配列が見つかり、島間で遺伝的な交流がほとんど無いことが示された(図4)。また、属島間では形態も有意に異なっており、特にくちばしの形態が異なっていた。以上の結果から、メグロは基本的に島間移動をおこなわないと考えられる(Kawakami *et al.* 2008)。これらの島は互いに数キロしか離れていない。それでもメグロにとって海は越えがたい障壁であるようだ。

海上に孤立した島では移動分散能力が低下することが動植物を問わず様々な分類群で知られている。メグロも島に適応して進化した典型的な鳥であるといえるだろう。

● メジロは、味方なのか、敵なのか

母島列島にはメグロと同所的にメジロが生息している。この地域にメジロは自然分布しておらず、移入されたイオウトウメジロとシチウトウメジロの雑種と考えられている(図5)。メグロとメジロは体サイズも食性も似ていることから、種間競争の影響が心配されることもあったが、メジロの増加に対し

てメグロの個体群密度は大きく変化が無く、集団レベルでの影響は見られていない(Kawakami & Higuchi 2003)。

小笠原諸島では、メグロは小型種子の散布者として機能していると考えられるが、聳島列島と父島列島では既に絶滅している。これらの地域では移入種であるメジロが、メグロの絶滅によって欠落した機能を補完していると考えられる(Kawakami *et al.* 2009)。



図5. 移入種のメジロ。シチウトウメジロとイオウトウメジロの雑種。

6. 引用・参考文献

- Higuchi, H., Nakane, M. & Maru, T. 1993. Home range and pair duration of the Bonin Islands Honeyeater *Apalopteron Familiare*. Strix 12: 23-33.
- Higuchi, H., Nakane, M. & Suzuki, A. 1984. Some notes on the ecology and behavior of the Bonin Islands Honeyeater *Apalopteron familiare*. Tori 33: 67-73.
- 蒲谷鶴彦・松田道生. 2001. 日本野鳥大鑑増補版鳴き声420. 小学館, 東京.
- Kawakami, K., Harada, S., Suzuki, T. & Higuchi, H. 2008. Genetic and morphological differences among populations of the Bonin Islands White-eye in Japan. Zool. Sci. 25: 882-887.
- Kawakami, K. & Higuchi, H. 2002. The first record of cavity nesting in the Ogasawara Islands Honeyeater *Apalopteron familiare* on Hahajima, Bonin Islands, Japan. Ornithol. Sci. 1: 153-154.
- Kawakami, K. & Higuchi, H. 2003. Interspecific interactions between the native and introduced white-eyes in the Bonin Islands. Ibis 145: 583-592.
- Kawakami, K., Mizusawa, L. & Higuchi, H. 2009. Re-established mutualism in a seed-dispersal system consisting of native and introduced birds and plants on the Bonin Islands, Japan. Ecol. Res. 24: 741-748.
- Kittlitz, F. H. 1830. Über die Vogel der Inselgruppe von Boninsima. Mem. Acad. Imp. St. Petersburg 1: 231-248.
- 初山徳太郎. 1930. 小笠原諸島並びに硫黄列島産の鳥類に就いて. 日本生物地理学会会報 1: 89-186.
- Morioka, H. & Sakane, T. 1978. Observations of the ecology and behavior of *Apalopteron familiare* (Aves, Meliphagidae). Mem. Natl. Sci. Mus., Tokyo 11: 169-188.
- Seebohm, H. 1890. On the Birds of the Bonin Islands. Ibis 32: 95-108.
- Springer, M. S., Higuchi, H., Ueda, K., Minton, J. & Sibley, C. G. 1995. Molecular evidence that the Bonin Islands Honeyeater is a White-eye. J. Yamashina Inst. Ornithol. 27: 66-77.
- Suzuki, T. 1993. Singing activity of the Bonin Islands Honeyeater *Apalopteron familiare* (Passeritormes, Meliphagidae). J. Yamashina Inst. Ornithol. 25: 93-101.
- 鈴木惟司. 2003. 覚え書き: 小笠原で日本人船乗りたちが出会った鳥(その2). 小笠原研究年報 26: 81-97.
- 上田恵介・長野康之・唐木雅徳. 1993. 母島におけるメグロ・メジロ・ウグイスの営巣場所と一腹卵数. 小笠原研究年報 16: 18-28.
- 山階芳麿. 1930. 聳島列島の鳥類. 鳥 6: 323-340.

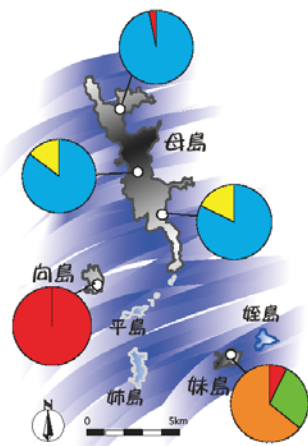


図4. メグロの島ごとの遺伝的な構成の違い。円グラフの色が、異なる塩基配列(ハプロタイプ)を持つ個体の割合を示している。

執筆

川上和人 森林総合研究所主任研究員

とうとう今年の前厄です。そのせいか、バイクのミラーは折れ、小指をぶつけ、花粉が飛散し、散々な日々を送っています。せめて、近著「鳥類学者 無謀にも恐竜を語る」(技術評論社)が売れてくれるといいなあ。

